

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月13日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520283

研究課題名（和文） 近代英国を中心としたエンブレムにおける聖と俗の表象に関する学際的研究

研究課題名（英文） An interdisciplinary research on the representation of the sacred and profane emblems principally in the early modern England

研究代表者

植月 恵一郎 (UETSUKI KEIICHIRO)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：10213373

研究成果の概要（和文）：

近代初期英国文学とエンブレムの関係を明らかにした。シェイクスピア劇や十七世紀英詩を対象に、キリスト教的起源の聖なる図像、モットー、警句と多神教の異教や土着の習俗起源の世俗的な図像、モットー、警句の絶妙な絡み合いから文学の豊饒な表現が生まれた過程を研究した。一方で地理的にも視野を拡大し、ドイツ、フランス、オランダなどを中心とする当時の文化的先進国のエンブレムが、英国のエンブレムに与えた影響も研究し、時間的な視野も広げ、図像と警句の関係は、十八～十九世紀の挿絵と物語の関係にも転じ、エンブレムの時間的変移も研究した。

研究成果の概要（英文）：

The research clarified the relationship between early modern British literature and emblems. It concluded that the fertility of literature in Shakespeare's plays and seventeenth century English poetry originated not only from the exquisite textures of sacred Christian iconographies, mottos and epigrams, but also secular pagan ones. It also studied the impact of the emblems of culturally developed countries in those days such as Germany, France, and the Netherlands on English emblems. Finally it investigated the iconographical relationships between the iconographies and the epigrams had been transformed into those between illustrations and stories in the eighteenth and the nineteenth century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学，英米・英語圏文学

キーワード：英文学、美術史、

(1) エンブレム、(2) シェイクスピア、(3) オットー・ウェニウス、(4) ジェフリー・ホイトニー、(5) ヴィーリクス、(6) ジオット、(7) リーパ、(8) 風景版画

1. 研究開始当初の背景

文学を専門とする研究者は、これまでモットーや警句の部分重視し、図像はほとんど考慮に入れることなく、研究対象となった文学作品の該当箇所と比較検討するに留まっていることが多かった。しかし影響関係をより精確に把握するためには図像部分も見逃すことはできないはずで、美術と文学両面からの学際的アプローチが重要となっていた。しかもエンブレムは本来 16 世紀ドイツに端を発し 2 世紀に亘ってイタリア、フランス、オランダなどで流行し、その間英国に伝播してきたことを考慮すると、大陸の影響も無視することはできない。

本研究では宗教的エンブレムの聖なる部分と人文主義的エンブレムの俗なる部分に注目し、両者の精妙な絡み合いが豊かな芸術作品を産み出す要因であることを明らかにする。さらに 18~19 世紀の挿絵本や絵本へどのように展開してきたかも視野に入れた広範な独創的研究である。

2. 研究の目的

2-1：近代初期英国のエンブレムが如何に大陸の影響を受けたのか、同時に如何に文学に影響を与えたのかを文学・美術の両面から明らかにする。

2-2：さらに歴史的展開に注目し、市民革命以降啓蒙主義の時代にエンブレムがどのように挿絵に影響していくのかを明らかにする。具体的には、エンブレム・ブックを挿絵入り書物として再定義し、18~19 世紀に出版された版画入り挿絵本に描かれた表象について考察し、文学、思想史、美術史の枠組みにおいても再構築する。

3. 研究の方法

【平成 21 (2009) 年度】

英文学関連グループでは、松田が、エンブレムの寓意の志向と宗教を基盤とした教育システムとの間に深い関わりがあるという先行研究を踏まえ、主にシェイクスピアの主要な場面とエンブレム表象に取り組んだ。

山本は、〈祝宴〉という文化的社会的行為において、エンブレムが当時どのような役割を果たしていたのか、特にサトゥルヌスの伝統との関係において考察した。

植月は、動物のエンブレム、とくに鹿、兎、蛇などについて考察した。西洋文化圏は本来狩猟民族によって形成されてきたし、農耕詩のサブ・ジャンルである狩猟詩では、鹿狩がよく取り上げられる。それは紳士の嗜みでも

あり、疑似戦闘でもあった。

一方美術を専門とするグループは次の研究方法に拠った。伊藤は、オットー・ウェニウスの『愛のエンブレム集』における俗愛の表象について、ヨーロッパの文学的伝統との連関において考察した。木村は、プランタンで刊行されたフランス語版(1570年)の影響と、そのイエズス会人文主義との関わりに光を当てた。出羽は、エンブレム・ブックを広く挿絵入り書物としてとらえ、風景版画入り挿絵本に描かれた土地の表象について考察し、寓意的意味の表象がはっきりと意図された図像ではなく、風景という土地の役割や位置づけを反映する具体的な表象が現れていることを検討した。

【平成 22 (2010) 年度】

松田は、昨年度に続き、対立する二者間のサイコマキアは、中世以来の魂と肉体の葛藤を謳った宗教詩の伝統をいかに受容しているのかを、同時代の宗教的エンブレム集や世俗的エンブレム集におけるサイコマキア表現に注目して見極め、エンブレムの寓意が聖、俗両面において、思考の表現の根幹にあったことの証明を試みた。山本は引き続きシェイクスピア劇に登場する様々なバンケット場面でのエンブレム、とくに絵皿に注目し、ほかの関連作品との関係を追及した。植月は 18 世紀からロマン派にかけての《鹿》のイメージとエンブレムの関係を考察していった。

美術関連グループの方では、伊藤はオットー・ウェニウスの『神的愛のエンブレム集』における聖愛の表象について、当時の宗教思想との連関において考察した。木村は、引き続き Junius を中心としたフランス系エンブレムの研究を継続し、平成 22 年度からは 18 世紀英国への影響も視野に入れ研究を行った。出羽は前年度に扱った挿絵を同時代の版画制作の観点から捉え、とくに版画技法・技術の発展とそれらの書物出版との関連に注目する。エンブレムを表象媒体としてだけではなく、挿絵というひとつの美術作品として捉えることによって、文学・思想史の文脈だけでなく、美術史の枠組みにおいて議論することが目的である。

【平成 23 (2011) 年度】

最終年度に当たっては、当初の目的である大陸・英国間のエンブレム受容関係を聖と俗の二つの側面からの考察をさらに深めた。まずイタリアを中心とするエンブレムを担当す

る伊藤は、16世紀後半ローマでイエズス会が刊行した図解入り聖書、およびアルチャートの『エンブレム集』の、キリシタン文学の『ヒデスの導師』と『平家物語』の題扉への影響などから聖なる側面を主に研究した。フランスを主とする大陸のエンブレム担当の木村は、やはり聖なるエンブレムに関してフランス近代における《慈愛の寓意》と炎の図像の関係を考察した。松田は、シェイクスピア作品におけるエンブレムとの相関関係を論じ、近代初期の人文主義的なエンブレム・ブックを取り上げ、当時の表象文化に広範な影響を与え、16世紀後半から17世紀にわたる宗教的な意図をもったエンブレム・ブックの隆盛に寄与した点をとくに考察した。山本は、俗なる宴会の席でエンブレムがどのように用いられているかに注目し、主にデザート用木皿に描かれたエンブレムや付随する警句詩の分析を通して、エンブレムの（食文化や装飾文化を含む）物質文化的背景を考察した。

植月は詩の方に注目し、こちらも俗な動物表象とくに極楽鳥や鹿のエンブレムの系譜を探った。出羽は本年度もエンブレムと風景版画の関係の調査を遂行した。

4. 研究成果

(1) シェイクスピアのエンブレムの〈聖〉と〈俗〉

十七世紀英国のエンブレム作家 Thomas Palmer の *Two Hundred Poesees* (Slone MS 3794) や、当時の絵画作品を中心に宗教的〈聖なる〉寓意を担った植物図像を調査し、同時に、現代の広告の象徴的手法に用いられた〈俗なる〉樹木まで視野に入れて、ピーター・デイリー氏を招聘した学術講演会にて発表した。さらに、パドヴァのスクロヴェーニ聖堂内における7大徳と7大悪徳に関するジオットの寓意像に注目した。ルネサンス初期の寓意表象の例として重要な作品で、Inconstanza が球の上で取った不安定な姿勢やベリーニの *Holy Allegory* (ca. 1500-05) の Justice と Truth を表象する女性の意味する象徴など、代表的な寓意像の集成であるリーパの『イコノロジーア』における《信仰》や《真実》といった美德の表象、《怒り》や《不実》といった悪徳も含めた神学的な像との関係から〈聖なる〉エンブレムを考察した。ヘンリー・ピーチャムは、リーパを借用しており、ピーチャムとリーパの比較検討も行った。松田は、近代初期英国におけるエンブレムの受容と変容、およびシェイクスピア作品におけるエンブレムとの相関関係を論じた単著『シェイクスピアとエンブレム—人文主義の文化的基層』を上梓し、宗教的な意図を

もったエンブレム・ブックが隆盛した点を強調した。

(2) 宴会場面での様々なエンブレム

グラスゴー大学での学会発表(2011年6月)では、エンブレムが英国ルネサンス期の宴会においてどのように用いられているかに注目し、主に木皿に描かれたエンブレムやそれに付随する警句詩の分析を通して、エンブレムの（食文化や装飾文化を含む）物質文化的背景を考察した。サー・ジョン・デイヴィスが1600年にトマス・サックヴィルの新年会のために書いた詩「世界の12不思議」は、ジョン・メイナードによって1608年にリュート用にメロディーをつけて出版され、1620年頃にはデザート用円盤木皿に描かれている。この木皿が当時どのように使用されたかを理解するために、メイナードのパトロン貴族が所有するロングリート・ハウスに刻まれた当時のバンケット実践の痕跡から考察した。同発表原稿はその後国際エンブレム協会の学会誌『エンブレマティカ』に投稿され採用が決まり、現在校正中である。また、ヴィクトリア・アルバート博物館や大英博物館に多く残されている他の木皿も取り上げ、アルチャートのエンブレム以外にどのようなエンブレムの図絵や意匠がバンケット木皿に多く利用されているか分析するとともに、サー・ジョン・デイヴィスの他の詩作品とその文化的社会的背景を考察した。『テンペスト』と祝宴のエンブレムについては、演劇映像の国際的教育研究拠点である早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラムの紀要(2012年3月)に、「植民地支配の家政術：英国カントリーハウス文化と『テンペスト』におけるプロスペローの魔法のバンケット」として掲載した。エリザベス朝のカントリーハウス文化を特徴づけている家政術やバンケット(=デザートコース)、仮面劇といった文化的要素を詳細に分析することにより、当時広く流布しつつあった新世界をめぐる植民地主義的言説が、シェイクスピア後期のロマンス劇である『テンペスト』という作品のバンケット表象にどのような影響を与えているかを考察した。『テンペスト』の仮面劇とバンケット表象に関して、私的空間への志向性やその創造、それにジェンダーに関わる社会的な問題がどのような意味を有しているかということについても検討を加えた。貴族的な古い価値観から新しい階級労働者の価値観への変化が、『テンペスト』とその宴会表象にどのように反映しているかについて論じ、また仮面劇やバンケット表象と私的空間への志向性やその創造、それにジェンダーに関わる社会的な問題の関係について検討を加えた。国内外の研究者と連携し、また英国や日本の図書館で資料調査を行うこ

とにより、ルネサンス期英国の宴会と当時の社会文化との関係を明らかにすることができた。

(3) 動物のエンブレム、特に鹿のエンブレム

動物のエンブレムのうちまず鹿に注目した。矢で傷ついた鹿のエンブレムとシェイクスピアの『お気に召すまま』の鹿狩への言及との関係を考察した。ジェイクウイズの嘆きは、鹿の嘆きであり、大団円で一人群れを離れる彼は、傷ついた鹿そのものである。さらにそのエンブレムがどういう風にマーヴェルの「仔鹿の死を嘆く乙女」に影響を与えたかを考察した。ひたすら仔鹿の死を嘆く乙女は、単にアレゴリカルな鹿の喪失を嘆いているのではなく、動物の死を前にした嘆きでもあり、鹿狩の残虐さをも呪っており、動物に対する瑞々しい感性を表現している。他にデナムの「クーパーの丘」の鹿狩や、キャヴェンディッシュの鹿狩、最終的にロマン派まで視野に入れ、ワーズワスの「鹿跳びの泉」の鹿狩、同じ詩人の「リルストンの白鹿」の鹿の表象も考察した。さらに兎狩にも目を配り、とくに『ピーター・ラビット』の差し替えられた挿絵と本文の関係を考察した。また、ロマン派の時代では、ブレイクの「虎」やワーズワスの〈極楽鳥〉とエンブレムの関係についても考察した。

(4) アンドレア・アルチャートの「愛のエンブレム」とキリシタン版の題扉

17世紀のイエズス会が布教の過程において、エンブレム・ブックを作成して利用したことはよく知られていることであるが、すでに16世紀の半ばからイメージとテキストの複合的な効果への関心は見いだされる。それは日本の宣教師たちが出版した書物、いわゆる「キリシタン版」においても例外ではなく、たとえば1592年に天草で刊行されたローマ字版『ドチリナキリシタン』の題扉では、直立したイエス・キリストが、右手を挙げ、左手で地球を象徴する球をもっている。この図の下に、「私は道であり、真理であり、生命である」という、『ヨハネによる福音書』(14:6)から採られた文言が記されている。

その翌年に刊行された世俗的な作品のひとつ、ローマ字版『平家物語』の題扉には、日本で初めて描かれた、古代ローマ風の光景を表した銅版画が見いだされる。頭に王冠を載せた青年が、四輪の奇妙な装飾に満ちた戦車の上に座っている。彼は左手に長い矢をもち、右手では戦車を牽く2頭のライオンの手綱を握っている。この図像には、ラテン語の銘文を具えており、その内容は、『箴言』(16:32)から採られた「自らの心を制御する者は都市を占領する者よりも強い」である。

図像に関しては、ヨーロッパの伝統においては、2頭のライオンを牽く戦車に乗る女性像は、ローマの将来された女神キュベレが原型である。それは中世の神話的なテキストへと伝えられ、ルネサンスにおいては、ペトラルカやボッカッチョの文学に登場し、またピントゥリッキオ、フランチェスコ・コッサ、ジョルジョ・ヴァザーリによって絵画化された。しかし、キリシタン版『平家物語』に登場する人物は青年であって、この伝統に与するものではない。他方、きわめて類似した図像は、アンドレア・アルチャート『エンブレム集』の「最も強力な情念たる愛」(1548年リヨン版、84頁)の、鞭を使って2頭のライオンを駆りたてている有翼のクピドに見られる。われわれの試論の結論は、このアルチャートのエンブレムに、当時、日本に伝えられたローマの将軍の姿(たとえば、《レバント戦闘図》における「ローマの王」と記された青年)が結合されて、『平家物語』の題扉が描かれたというものである。

(5) 十七世紀フランスの絵画とエンブレム

フランスにおけるカトリック・エンブレム研究のための基礎研究として、ヴィーリクスの版画とシャンパーニュの宗教絵画を分析した。高精細デジタル画像による撮影が完了している、Junius 著 *Emblemata*(1565, 日本大学芸術学部所蔵)の基礎研究を行った。オウィディウス Ovid の『変身物語』<http://www.ovidmeta.jp> 作成の経験にもとづいて、画像だけでなく学術論文・関連データも添付した公開を試みた。他にもブランタンで刊行されたフランス語版(1570年)の影響と、そのイエズス会人文主義との関わりも視野に入れ、さらに、十七世紀フランスにおける宗教図像上のエンブレム分析のための基礎研究として、シャンパーニュ作《煉獄の魂》を、美術史的な観点から詳細に分析した。同時に〈聖〉なるエンブレムに関する論文「フランス近代における《慈愛の寓意》と炎の図像について」を刊行した。

(6) 叙景詩と風景画とエンブレム

この分野の研究成果としては、「一九世紀初頭英仏風景画の比較から見るターナーの空間構成」[『美学』235号、2009年]、及び「ターナーの絵画制作における詩の役割」[『國學院大學紀要』50号、2012年]が挙げられる。前者では、ターナーの絵画空間がどのように構成されたのかについて、同時代のフランス風景画及びその理論と比較して検討した。ターナーや同時代のイギリスのアカデミーの画家たちは、同時代のフランスの絵画は奥行き表現が満足にできていないと批判していたが、プランという垂直面と、グラウンドという水平面という、それぞれに異

なる単位をもとに絵画空間をとらえたという違いにより、ターナーらは同時代のフランス絵画の空間を、奥行き表現がなされていないと批判したのだった。この比較を踏まえ、ターナー自身が奥行きのあるグラウンドと巧みな色彩によって絵画空間に奥行きを表現し、フランスの絵画には表現できない優れた奥行きを自身の風景画で表現したことを指摘した。後者では、ターナーの風景画における詩的要素の導入について議論した。ターナーはロイヤル・アカデミーで行う講義の準備として、過去の美術理論を広く学んだが、そのなかには、詩と絵画の伝統的な詩画比較論も含まれていて、詩的要素を風景画に取り込むことは彼の制作の重要な課題のひとつだった。そして、作品を詩的なものにする一つの方法は、詩の特徴である連想を絵画に取り込むことだった。具体的には、連想を引き起こす要素をテキストあるいは絵画表現によって採り入れ、そこから喚起される物語を導入したのである。物語の導入は、アカデミーの展覧会作品はもちろん、トポグラフィーにも適用された。詩画比較論を踏まえて地誌や風景の記録という側面の強いトポグラフィーにも物語を採り入れたことは、トポグラフィーに新たな展開を生みだし、物語絵画の境界を拡大したとも言え、その点にターナーの革新を見出した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計24件)

1. 出羽 尚、ターナーの絵画制作における詩の役割、國學院大學紀要、査読有、50号、2012、1-28頁。
2. 伊藤 博明、ポッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』、埼玉大学紀要 (教養学部)、査読無、45巻2号、2012、1-15頁。
3. 植月 恵一郎、風のアルバトロス—『老水夫の唄』のエコロジー、松島正一編『ヘルメスたちの饗宴』 (音羽書房鶴見書店)、査読無、2012、168-94頁。
4. 植月 恵一郎、脚のない鳥—ワーズワスの極楽鳥を中心に、日本大学芸術学部紀要、査読有、第55号、2012、47-60頁。
5. 木村 三郎、バロック絵画研究における、フランスの新世代の研究者たち、美術史論集 (神戸大学美術史研究会)、査読無、12号、2012、121-126頁。
6. 松田 美作子、近代初期英国におけるリーパ『イコノロジーア』の受容—ヘンリー・ピーチャムの『ブリタニアのミネルウァ』 (ロンドン・1612年)を中心に、成城イングリッシュ・モノグラフ、査読有、第43号、2012、543-57頁。
7. 伊藤 博明、キリシタン版とエンブレム(1)—『平家物語』(1593年)の題扉をめぐる、埼玉大学紀要 (教養学部)、査読無、47号、2011、17-32頁。
8. 伊藤 博明、フランシス・ベイコンと『古代人の智恵』、科学史研究、査読有、50号、2011、18-24頁。
9. 植月 恵一郎、英国文学自然文化誌—鳥類篇、江古田文学、査読無、78号、2011、162-90頁。
10. 植月 恵一郎、鶏鳴、藝文攷、査読無、17号、2011、93-102頁。
11. 植月 恵一郎、花輪とウロボロス—「花冠」の構造分析、日本大学芸術学部紀要、査読有、53号、2011、47-54頁。
12. 木村 三郎、フランス近代における《慈愛の寓意》と炎の図像について、日本大学芸術学部紀要、査読有、54号、2011、45-57頁。
13. 木村 三郎、ゴンクールの歌麿論、そして、グラヴロ論—18世紀のファッションを見る眼、18世紀学会・学会ニュース、査読無、67号、2011、10-13頁。
14. 木村 三郎、ラ・ヴリリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画、日本大学芸術学部紀要、査読有、55号、2011、61-77頁。
15. Shinji Yamamoto. “Artificial Exorcism: The Theatre of Nothing in Q1 King Lear”、天理大学学報、査読有、62号、2011、33-49頁。
16. Shinji Yamamoto. “Sanitizing Ajax, or the ‘Privy’: Falstaff’s Festive Space and the Government of the Body in Henry IV”、演劇博物館 グローバルCOE紀要 演劇映像学2010、査読無、5号、2011、35-59頁。
17. Hiroaki Ito. “The Reception of Dutch Emblems in Japan,” The International Emblem from Incunabula to the Internet、査読有、2010、264-82。
18. 伊藤 博明、猫の首をつける(1)—アステーミオ『百話集』をめぐる、埼玉大学紀要 (教養学部)、査読無、46巻1号、2010、31-69頁。
19. 植月 恵一郎、反復と抑圧—ピーター・ラビットとマグレガー夫妻、日本大学芸術学部紀要、査読有、第51号、2010、29-37頁。
20. 植月 恵一郎、虎よ、なぜお前は微笑むのか?—ブレイクの「虎」について、New Perspective、査読有、191号、2010、44-53頁。
21. 植月 恵一郎、庭の中心で動物愛を叫ぶ—マーヴェルの『仔鹿の死を嘆く乙女』について、日本大学芸術学部紀要、査読有、第52号、2010、45-55頁。

22. 木村 三郎、アンドレ・フェリピアン著『フィリップ・ド・シャンパーニュ伝』一六二〇—一四〇年代における宗教画制作を視点に考える、日本大学芸術学部紀要、査読有、第51号、2010、39-54頁。

23. 木村 三郎、フィリップ・ド・シャンパーニュ作『煉獄の魂』について、日本大学芸術学部紀要、査読有、52号、2010、57-68頁。

24. 出羽 尚、十九世紀初頭英仏風景画の比較から見るターナーの空間構成、美学、査読有、第235号、2009、112-25頁。

〔学会発表〕(計12件)

1. 出羽 尚、J. M. W. ターナー作『妻を運ぶ女性のいるリッチモンド・ヒル』の主題について、美術史学会第64回全国大会、2011年5月22日、同志社大学。

2. Hiroaki Ito. “Two Lions from Rome to Japan,” Society for Emblem Studies, 2011年6月30日、University of Glasgow.

3. 伊藤 博明、キリシタン文学とエンブレム——『ヒデスの導師』と『平家物語』の題扉をめぐる、ルネサンス研究会、2011年7月9日、学習院女子大学。

4. 植月 恵一郎、極楽鳥のオリエンタリズム、イギリス・ロマン派学会、2011年10月23日、山梨大学甲府西キャンパス 人間教育科学部。

5. 山本 真司、Banqueting Trenchers and the Emblematic Tradition in English Renaissance Culture and Society, The Society for Emblem Studies, Glasgow conference, UK, 2011年6月30日、Glasgow University.

6. 伊藤 博明、フランシス・ベイコン『大革新』の扉頁をめぐる、日本エンブレム協会(第4回)例会、2010年3月24日、成城大学。

7. 植月 恵一郎、Cowper: The Task—動物の権利を考える、イギリス・ロマン派学会、2010年6月5日、早稲田大学教育学部。

8. 山本 真司、詩人Sir John Daviesとエンブレム、日本エンブレム協会(第4回)例会、2010年3月24日、成城大学。

9. 出羽 尚、ターナーの『イングランド: 摂政皇太子誕生日のリッチモンド・ヒル』(1819)の解釈: 風景版画との関連から、欧米言語文化学会、2009年12月13日、日本大学文理学部。

10. 植月 恵一郎、”The Nymph Complaining for the Death of Her Faun”と鹿狩、十七世紀英文学会東京支部例会、2009年11月21日、大東文化大学。

11. 木村 三郎、西洋の17世紀における煉獄図像について—ヴィーリクスとその

影響、欧米言語文化学会、2009年12月13日、日本大学文理学部。

12. 松田 美作子、“Some Japanese Examples of Symbolic Advertising”、ピーター・デイリー氏招聘学術講演会、2009年12月11日、埼玉大学教養学部。

〔図書〕(計4件)

1. 松田 美作子、慶應義塾大学出版会、『シェイクスピアとエンブレム—人文主義の文化的基層』2012、総313頁。

2. 伊藤 博明、講談社、『ルネサンスの神秘思想』、2012、総434頁。

3. 木村 三郎、左右社、『西洋近代絵画の見方・学び方』、2011、総223頁。

4. 伊藤 博明、ありな書房、オットー・ウェニウス、ダニエル・ヘインシウス著『愛のエンブレム集』伊藤博明訳、2009、総226頁。

〔その他〕

ホームページ等

① 『西洋近代絵画の見方・学び方』同参考文献

<http://homepage3.nifty.com/saburo-kimura/TOP.htm>、

② 『フランス19世紀同時代人ギャラリー』作業統括、並びに、序文執筆、<http://galeriecont.cin.nihon-u.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植月 恵一郎 (UETSUKI KEIICHIRO)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：10213373

(2) 研究分担者

松田 美作子 (MATSUDA MISAKO)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10407611

山本 真司 (YAMAMOTO SHINJI)

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：80434976

伊藤 博明 (ITO HIROAKI)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：70184679

木村 三郎 (KIMURA SABURO)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：00130477

出羽 尚 (IZUHA TAKASHI)

日本大学・芸術学部・研究員

研究者番号：00434069